

目 次	CONTENTS
■2009 年（第 8 回）年次大会について	1
大会委員長からの挨拶	2
大会発表応募要項	3
大会概要(プログラム予定)	4
ハンガリーシンポジウム報告	5
地区研究会報告	関東 … 7 関西・中部 … 8 九州 … 10
地区研究会案内	11
2008 年度第 3 回理事会議事録	12
理事選挙結果について	14
新理事より	15
Web 管理委員会より	17
お知らせ 学会情報	18
編集部より	18

2009 年度年次大会について

【開催日】10 月 17 日（土）および 18 日（日）

【会場】関西大学 高槻キャンパス

【大会テーマ】

対話の創造と深化

“Engaging in Multicultural Dialogue”



ただ今研究発表を募集中です。ふるってご応募下さい。

(応募要項はp.3をご参照下さい)

締め切りは 7 月 25 日(土) (必着) です。

大会委員長挨拶

多文化関係学会 第8回年次大会へのご招待

久保田 真弓（関西大学）

多文化関係学会（JSMR: Japan Society for Multicultural Relations）の第8回年次大会は、来る10月17日（土）、18日（日）に関西大学高槻キャンパスで開催されます。また、大会前日の16日（金）には、プレカンファレンス・ワークショップも同キャンパスで実施されます。

今年度は、「対話の創造と深化」（“Engaging in Multicultural Dialogue”）という大会テーマのもとに、人間性を取り戻し、背景の異なる人々や民族などが真の意味で対話を深めるには、どのような視点が必要かを再考することをねらいとします。技術革新の結果、多種多様な情報が大量に流れる一方で、「バナナダイエット」などに見られるように人々の興味関心は、一極に集中する傾向にあります。「象徴的貧困」ともいわれ、過剰な情報を処理しきれなくなった人々の想像力や判断力は、低下の一途をたどっているとも言えましょう。そんな社会で一人一人の個を尊重し、今一度、他者の立場にたって対話の在り方を批判的に見直す必要があるのではないのでしょうか。本大会では、会員皆様の日頃の研究成果を発表していただくとともに、関西方面での会員を拡大し、互いの意見交換の場として、また、さらなる研究の進展に寄与できることを願っております。

大会第1日目の招聘講演では、子どもと養育者のコミュニケーションなどを緻密に観察し、関係発達論の構築をめざした鯨岡峻氏（中京大学教授、京都大学名誉教授）をお招きし、「コミュニケーションの感性的側面を振り返る」と題するご講演をいただきます。また、パネルディスカッションでは、「力動するコミュニケーションー笑い・メディア・ICTを通して」というテーマで誰にも子どもの時から備わっているはずの広義の情動に笑いやメディア、ICT（Information Communication Technology）を通していかに触れる（引き出す）か、を検討する予定です。第2日目は、オープンフォーラム「かくれた次元をさぐる一日中韓のはざままで」を開催し、日中、日韓の関係性について独自の視点をお持ちの2人のパネリストから話題提供していただき、参加者とともにこれまでにない日中韓の関係性について掘り下げて議論していきたいと考えています。また、大会前日のプレカンファレンス・ワークショップでは、「テレビ会議システムによる国際交流学習ースカイプを使った体験的ワークショップ」と題し、実際に発展途上国で活躍する国際ボランティア等と中継し、テレビ会議を体感していただくとともに、いくつかの交流学習の事例をとおして教育的活用方法について参加者とともに検討します。最後になりましたが、去年に引き続きポスターセッションの時間も設けています。

開催校の関西大学高槻キャンパスは、JR京都駅と大阪駅の中央に位置した高槻駅から、バスで20分くらいのぼった山の中腹にあります。広大なキャンパスには、アイスアリーナがあり、関西大学アイススケート部所属の高橋大輔、織田信成らも練習しています。また、20頭の馬をかかえた馬術部も朝早くから練習しています。都会の喧騒を離れ、澄み切った空気と緑豊かなキャンパスでお待ちしておりますので、お誘い合わせのうえ、奮ってご参加ください。

2009 年度年次大会・発表応募要項

1. 発表テーマ：本学会の趣旨に沿ったもので、未発表のものに限ります。
2. 発表時間：30分（発表20分、質疑応答10分）
3. 申込締切：2009年7月25日（土）（必着）
4. 申込要領：A4サイズ用紙1枚に次の7点を明記し、電子メール（送付）とハードコピー（郵送）を大会準備委員会宛てにお送りください。
 - (1) 発表タイトル
 - (2) 発表者全員の氏名と所属
 - (3) 発表概要（500-600字）
 - (4) 多文化関係学との関連性（約200字）：発表内容がどのような点で多文化関係学と関連するのか簡潔に記してください。
 - (5) 本学会の関連主要研究領域（社会・心理・言語・コミュニケーション・地域間研究）から1領域を明記してください。
 - (6) 発表形式：次の3つから選択してください。
 - ① 口頭発表
 - ② 口頭発表（学生単独による発表、石井米雄奨励賞対象）
 - ③ ポスターセッション
 - (7) 代表者の個人情報（氏名・所属・職責・専門分野・連絡先住所・電話・電子メールアドレス）
5. 発表者の決定：発表申込書は大会委員会で審議し、採用となった発表者には7月31日ごろまでに電子メールで連絡します。
6. 抄録原稿の提出：発表予定者は8月31日までに発表内容の抄録原稿を下記の宛先の大会委員長に送ること。A4サイズ2枚または4枚のいずれか。ワードで作成し、横40字、縦30行とする。文字の大きさは、10.5～11ポイント、日本語の文字は平成明朝、またはMS明朝、英語の文字はTimes New Romanを使う。提出は、電子メールによって添付書類で送付すると同時に、ハードコピーを大会準備委員会に郵送する。この用紙は大会当日『第8回年次大会発表抄録集』として参加者に配布します。
7. 学生による単独発表の場合は、石井米雄奨励賞（学生研究発表奨励賞 1件2万円 5名以内）に応募することができます。応募方法、審査、発表については発表決定者に詳細をお知らせいたします。抄録原稿提出時に、申請書に記入の上送付してください。
8. 発表応募資格：当学会員である必要がありますので、2009年度の会費納入状況をHP上でご確認ください。

大会準備委員会の宛先

住 所： 〒569-1095 高槻市霊仙寺町2-1-1
関西大学久保田真弓研究室 多文化関係学会・大会準備委員会
メールアドレス： jsmr2009kansai@gmail.com
電話・ファックス： (072) 690-2406（大学直通）

2009 年度 年次大会・概要

【大会テーマ】

対話の創造と深化

“Engaging in Multicultural Dialogue”

●10月16日（金）大会前日

プレカンファランス・ワークショップ（先着順25名まで）・・・・・・・・ 13:30 - 16:30

「テレビ会議システムによる国際交流学習—スカイプを使った体験的ワークショップ」

講師：久保田真弓氏（関西大学総合情報学部教授）

●10月17日（土）大会初日

研究発表1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10:00 - 11:05

研究発表2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11:20 - 12:25

総会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13:20 - 13:50

招聘講演・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14:00 - 15:30

「コミュニケーションの感性的側面を振り返る」

講演者：鯨岡峻氏（中京大学教授、京都大学名誉教授）

司会：八島智子氏（関西大学外国語学部教授）

パネルディスカッション・・・・・・・・・・・・・・・・ 15:45 - 17:45

「力動するコミュニケーション—笑い・メディア・ICTを通して」

パネリスト：築樋博子氏（豊橋市教育委員会外国人児童生徒教育相談員）、

日比野純一氏（NPO法人たかとりコミュニティセンター専務理事、(株)FMわいわい

代表取締役）、谷雅徳氏（関西大学客員教授、晴れ時々書家 俵越山）

コーディネーター：久保田真弓氏（関西大学総合情報学部教授）

音楽舞踊と懇親会・・・・・・・・・・・・・・・・ 17:45 - 20:00

●10月18日（日）大会二日目

研究発表3・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 09:30 - 10:35

研究発表4・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10:50 - 11:55

ポスターセッション・・・・・・・・・・・・・・・・ 11:55 - 13:30

オープンフォーラム・・・・・・・・・・・・・・・・ 13:30 - 15:30

「かくれた次元をさぐる—日中韓のはざまで」

パネリスト：三瀧正道氏（麗澤大学教授）、小倉紀蔵氏（京都大学准教授）

コーディネーター：松田陽子氏（兵庫県立大学経済学部教授）

○会場：関西大学高槻キャンパス（<http://www.kansai-u.ac.jp/index.html>）

・JR高槻駅または摂津富田駅よりバス15分～25分

○参加費

◎事前申し込み（09年9月30日（水）までに振り込み）の場合

正会員 2,500 円、 非会員 3,500 円、 学生会員 1,000 円、 学生非会員 1,500 円

◎上記期間以降・当日受付の場合

正会員 3,500 円、 非会員 4,500 円、 学生会員 1,500 円、 学生非会員 2,000 円

◎プレカンファランス・ワークショップ（事前受付のみ）

正会員 1,500 円、 非会員 2,000 円、 学生会員 1,000 円、 学生非会員 1,500 円

◎懇親会費

正会員 4,000 円（当日 5,000 円）、 学生会員 2,000 円（当日 2,500 円）

大会詳細・入会申し込みは、学会ホームページへ：<http://www.js-mr.org/>

多文化関係学会・ブダペスト商科大学共同シンポジウムの開催

多文化関係学会では、初の海外プログラムとして、ブダペスト商科大学との共同シンポジウムをハンガリーにて開催しました。元学会理事で、現在は母国ハンガリーに戻り、欧州圏との研究交流担当の特任理事を務めてくださっている Hidasi Judit（ヒダシ・ユディット）先生のご協力を得て、日本とハンガリーの研究者の対話を図り、両国の近隣地域との関係のあり方について議論し合うことで、「多文化関係学」の新たな視座を得ることを目的として企画されました。

松田陽子（兵庫県立大学）

ハンガリーシンポジウムに参加して

長谷川典子（北星学園大学）

2009年3月27日、ブダペスト商科大学（ブダペストビジネススクール＝（BBS））と多文化関係学会の共催で行われたシンポジウムに参加した。多文化関係学会、海外での初会合として開かれた当会議であるが、Synergy of Cultural Dialogue のテーマ通り、両国からの参加者が発表やパネルディスカッションといった正式のプログラムだけではなく昼食会、コーヒーブレイク、夕食会の時間、さらにはBBSのご好意により計画された会議後の小旅行などのインフォーマルな場でも文化間の問題について熱く語り合うことができ、まさに「シナジー」の生成を肌で感じる事ができた。今回、数日間の濃密な学びの時間を限られたスペースで紹介するという難題を頂いたので、無理を承知で以下に「駆け足」でシンポ



スピーチする久米会長

ジウムの内容を中心に紹介したい。

会議はまず、学会の在外特任理事の Hidası 教授 (BBS) の挨拶で始まった。その後、久米会長 (立命館大学) によるゲストスピーチを経、プレゼンテーションセッションへと続いた。セッションはまず、BBS の Osvath 教授による日韓の言語比較に関する発表で始まった。その後、稲葉会員 (立命館大学) が、自身も開発に携わっている、日本語、日本文化の研究者にとって宝の山とでも言える Digital Humanities の構築についてのプレゼンテーションを行った。午前のコーヒープレークに引き続き、Vihar 教授 (ELTA) がハンガリーにおける俳句の展開について、自身の作品を披露しつつ報告を行った。さらに、小林会員 (総合研究大学院大学) は、ICT 利用の遠隔教育における懸案課題として、”Linguapolitics” を取り上げ、その解決策を提示した。

昼食を挟んでのインフォーマルな情報交換の後、午後のセッションが始まった。まず最初は、BBS の Kollath 教授による研究発表が行われ、日中洪の 3 カ国で行われている小集団討論の比較研究のうち、今回はハンガリーの人々のコミュニケーション・スタイルについての結果が報告された。次に、伊藤会員 (藤女子大学) が自身の教育現場での実践を基に、日本文化や日本人のコミュニケーション文化を軸とした新しい英語教育法を構築する必要性について論じた。

これらの研究発表後、小林会員の司会で「アジアの中の日本、ヨーロッパの中のハンガリー」と題したパネルディスカッションが行われた。まず最初に松田会員 (兵庫県立大学) が日中韓の歴史的関係と現代のメディア交流および、相互関係の現状を報告し、今後の展望について語った。次に、久保田会員 (関西大学) がテレビ会議を利用し、日中の大学生間で行われたプロジェクト型学習の実践報告を行った。ハンガリー側からは、まず、Bano 教授 (BBS) がビジネスにおけるハンガリー人の異文化交流スタイルについて、ホッフステッドの研究成果を援用しつつ紹介し、次に Veres 教授 (BBS) がハンガリーを取り巻く現在の経済・政治・文化状況を、特に EU との関連で詳述した。その後、フロアーからの参加者も交え、両国が抱えている諸問題について熱のこもった議論が戦わされた。最後にコメンテーターの Hidası 教授が、言語的孤立性、島国メンタリティー、歴史の重みなど日洪の間に多くの共通点が存在していることを指摘した上で、両国ともグローバル化による社会の多様化を前向きに捉え、早急に対処法を講じる必要があることを力説した。会議を通し、混迷するヨーロッパの中で、多文化化の波にもまれながら、国としてのあり方を模索しているハンガリーの姿は、同じくアジアの中でそのあるべき姿や方向性を模索している日本の姿と重なることも多く、両国の研究者には現在多くの共通課題が提示されていることを改めて強く感じさせられた。

また、3月30日には小松会員 (名古屋学院大学) による日本社会・文化についての講演が行われた。学内外から多数の参加者があり盛会となった講演会の様子は、後日ブダペストの新聞にも大きく取り上げられ、本学会の日洪両国の相互理解に向けての取り組みは、ささやかながらも実を結びつつあることが実感できた。日本からの参加者を温かく迎えて下さった Hidası 教授をはじめ、BBS の先生方のホスピタリティーに感謝しつつ、また充実した数日を異国の地で過ごせたことに幸せを感じながら帰国の途についた。



シンポジウムに参加した面々

(写真撮影 立命館大学 稲葉光行氏)

地区研究会報告



■関東地区研究会・ホラロジーの会 ジョイント研究会

日時：2009年3月15日(日)

場所：立教大学池袋キャンパス

第1部：研究会

「短期留学生の日本留学の光と影：日本らしい異文化交流をもとめて」

話題提供者：手塚千鶴子氏（慶応大学日本語・日本文化教育センター）

本報告では、グローバル化の中で、日本のポップカルチャーに憧れを持ったり、マルチカルチュラルな人が増えるなど、訪日短期留学生に変化が生じていること、留学の動機や目的なども多様化していることが、まず指摘された。異文化交流を考えると、交流する主体を把握することは一義的に大切なことである。

次に、短期留学生が日本で感じるカルチャーショックや、異文化コミュニケーションギャップを乗り越えるために、授業やカウンセリングを通して支援する手塚氏の具体的手法が紹介されたが、いずれも大変興味深いものだった。最も興味深かったのは、異文化間における「怒り」の表現の違いを授業で討論するために、受講する留学生と日本人学生が描いた怒りをイメージする絵の違いである。留学生は噴火する火山を描くなど、怒りそのものをストレートに表現するが、日本人の学生は、怒りを表現するのみならず涙を描くなど、日本人の怒りには悲しみが伴うという。この指摘は大変面白く、それはなぜなのかということが大変気になった。

短期留学生は、日本での留学期間が正に短期であるが故に、第三者による異文化適応のための支援の重要性が痛感されるのだが、気づきや自己内省など、留学生の人的成長を促しながら異文化理解や異文化コミュニケーションギャップを乗り越えさせようとするところに、手塚氏のカウンセラーとしての暖かいまなざしが感じられた。

かつて文化を盛んに取り入れる側であった日本が、今やポップカルチャーを中心に文化を発信する側となり、短期留学生にも憧れをもたれる時代になっているからこそできる国際交流があるはずであり、また、日本人と留学生が同じ教室で共に学ぶ異文化間教育などを通して、短期留学生支援の可能性を充分見出すことができるという手塚氏の思いは、現場での確かな手応えによるものなのだと実感できる報告だった。

文責：花澤聖子（神田外語大学）

第2部：ホラロジーの会

「持続維持可能な社会における『お蔭様』のコミュニケーションの意義と役割」

話題提供者：坂井二郎氏（立教大学ランゲージセンター）



「お元気ですか。」「お蔭様で元気です。」「試験はどうでしたか。」「お蔭様で合格しました。」
上記のような挨拶言葉は日本人の口からよく聞く。ずっと根拠のない話だと思っていた。自分の「元気」はなぜ会ってもいない他人の「お陰」なのだろう。自分の努力で試験に受かったのにどうしてそれと関係のない人の「お陰」なのだろう。このように思いつつ、いままで「お陰様」という言葉の使用に抵抗してきた。坂井先生の「お陰様」コミュニケーション説を聞き、「お陰様」の深いところに含まれていた世界観が見え、暖かい気持ちを持つようになった。「お陰様」という言葉を使いたくなってきた。

私の気持ちを変えたのは坂井先生の「お蔭様」に対する解釈である。「お蔭」というのはわれわれが普段意識していない異質な存在、あるいは他者である。これは自然環境であり、近い、あるいは遠いところで同じ地球に生きている人間である。われわれの存在はこれらの存在により成り立っている。われわれの生存状態はこれらのものの存在による影響を受けている。そして普段「気付かない形で」これらの要素による恩恵を受けている。だが、人間中心主義、自己・自文化中心の見地でこの「お蔭様」のことが見えなくなっている。その結果は自然生態環境の破壊、他人の意識および多民族の文化の無視を行っている。一方通行のコミュニケーションによる「お蔭様」の精神が無自覚になっている。というのは「お蔭様」は人間と自然、人間と人間世界の関連性を重視し、そして異質なものと他者の存在を自分の存在に意味するという精神を提唱する概念と理解してもよいであろう。冒頭の話に戻ると、他者は自分が元気であることに何らかの理由で繋がっていると考えてよい。自分の試験の合格は見えないところで他者と関連していると考えていく。プラスなことだけではなく、マイナスなことも考えられる。ただ、「お蔭様」の発想で考えれば、プラスもマイナスもなくなるであろう。坂井先生のお蔭で「お蔭様」が大好きになってきた。「お蔭様」精神を普及すると世界は平和になるであろう。

文責：張 曉瑞（明星大学）

■関西・中部地区研究会

日時： 2009年3月7日(土)

場所： 名古屋学院大学（白鳥学舎：名古屋市内の新校舎）

中部地区研究会としては2度目の開催であり、当日は約23名の参加がありました。参加者は地元ジャーナリスト、一般社会人、学生、学会員と多様な参加者で、大変刺激的な研究発表と活発な質疑応答が行われました。ゲストスピーカーは、地元の大学教師・青山晴美氏と沖縄在住の沖縄研究家・輿石正氏で、青山氏はオーストラリアのアボリジニ研究を専門とし、輿石氏は永年日本政治と民主化・人権問題に深く関わった方々です。それぞれの講演概要は以下の通りです。

第1部：「オーストラリア：200年の悲劇の歴史を乗り越えて、今、和解への道へ」

話題提供者：青山晴美氏（愛知学泉短期大学）

Part 1. アメリカでの体験から先住民への興味

アメリカでの生活の中で、アジア人(有色人種)としてマイノリティの立場を経験したことから先住民に関心を持つ。先住民との出会いを求めて、合衆国大陸横断、カナダ、メキシコ各地を旅



する。それは、アイデンティティーを求める自分探しの旅でもあった。失われた文化を取り戻しアイデンティティーの確立を願いつつ、現実社会での差別や偏見、「白人」によって植え付けられた劣等意識からぬけることができずに苦しんでいる先住民の実態を目のあたりにした。メキシコのサンミゲルで、道端でうずくまる飢えたインディオの老婆を腕に抱いたとき、先住民のために役立つことを生涯の仕事にすることを決意する。

Part 2. オーストラリアのアボリジニ学部での学び

帰国後、中国大陸を横断。チベット人とヒマラヤ山間少数民族をたずねる。その後、オーストラリアでアボリジニと出会い、アボリジニ学部に入學。同学部では、アボリジニの文化・社会だけでなく、アボリジニを虐殺し差別したヨーロッパ人の思想を見直し、オーストラリア社会や歴史に対する従来の見識にパラダイムシフトをかけることを学んだ。同時に、伝統的アボリジニ社会の「人として生きる道」に共感し、それが人生の目標となる。

Part 3. 和解への道を模索するオーストラリアと日本の多文化理解にどう貢献できるのか

多文化主義国家オーストラリアのアボリジニと「白人」との和解の道は、世界の多くの国の道しるべとなるものである。和解には双方の意識改革が必要だが、本来アボリジニの思想にある「つながり」を意識の中心にもってこることが大切となる。日本においても、オーストラリア同様、多文化理解のために、日本の歴史・社会・思想にパラダイムシフトをかけてみることも必要であろう。先住民とのかかわりは個人的にも多くの影響を及ぼした。アメリカ時代に体験したアイデンティティーのゆらぎに端を発した先住民を訪ねる旅だったが、モノや形と結びついたアイデンティティーの確立ではなく、生き生きとした生命体(アボリジニ的に言えば、Ancestral Spirit Beings であり宇宙の創造意識)である自分に気づくことで、心に平安を取り戻すことができた。

第2部： 「沖縄戦／〈同化〉と〈異化〉のはざまの島で」

話題提供者：興石正氏（名護高等予備校、「じんぶん企画」代表）

錯綜する座標軸：沖縄・山原^{ヤンバル}・名護に移住して23年。予備校経営、エコツアーガイド会社設立、事典づくり、市民運動、審議員、映画づくりなど、そのほとんどを沖縄の山原でやってきた。しかし、「沖縄」は私から遠い。それは、何か「原型としての沖縄」を設定してそこにまだ私が至っていないという意味での「遠い」ではなく、私のまわりに今ある「沖縄」に私が遠ざけられているという感覚のレベルで、「遠い」のである。23年間、私の立つ位置は本土の座標から少しずつ沖縄のそれへと移動していて、いまだ移動の過程であるといっている。しかし、それが私に新しい視座を開き、マージナルな領域で浮遊している感覚を与えつづけている。その感覚に寄りそいながら「沖縄戦」を撮ったものが、『未決・沖縄戦』である。沖縄山原での沖縄戦の映画という今まで手つかずの領域にわけ入り、つくり終えたのだが、私には「沖縄」はますます遠く、なにひとつ安心感らしきものは得られていない。

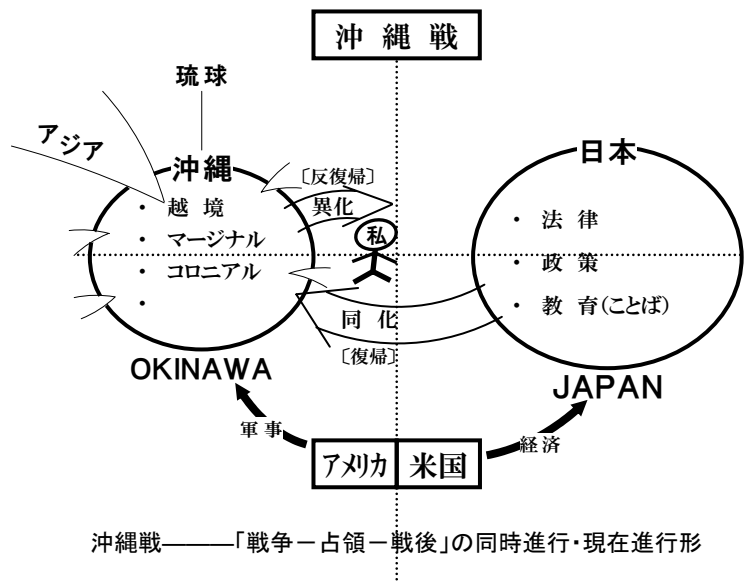
本土日本からの〈同化〉と本土日本への〈異化〉は、どちらが沖縄の光と影なのかはわからないが、「沖縄」のあらゆる座標をつきとおすベクトルであることはまちがいない。米軍基地という60余年におよぶ現実から立ちのぼるコロニアルな領域と、ユーモア・リズムとまぜっかえし（ちゃんぷるう）のミックス文化の領域を刺しとおすこのベクトルを、「沖縄戦」にぶつけてみた。そこでまず話が進めやすいように、異文化圏としての沖縄の現実の位相を図式化しておくことにした。今回のレクチャーは、5分程度の自己紹介と5分のDVD視聴の後に、この図を読み解



く、という形ですすめたい。討議の中で座標軸が激しくゆれることを期待している。

文責：井上美砂

<概念図>



■九州地区研究会

日時：2009年3月12日(木)

場所：九州大学六本松地区キャンパス

『異文化』をテーマにした授業の試み

—世界のアニメ作品 (Animated Tales of the World) を使った実践から得られた授業指針—

話題提供者：谷之口博美氏 (別府大学非常勤講師)

本発表では、別府大学で行われた授業の実践報告をもとに、「異文化」をテーマにした授業のあり方について議論がなされた。日本で勉強する留学生の中には、日本人学生との交流がほとんどなく、異文化交流の機会が持てない学生も存在する。そのような背景のある中、留学生に対する日本語の授業に異文化コミュニケーション教育を取り入れることが試みられ、その効果が報告されるとともに、「異文化」をテーマにした授業の指針が示された。

授業では、宮沢賢治作『雪渡り』のアニメが教材として用いられた。アニメ鑑賞後、物語のメッセージについて作文させ、それぞれの意見を発表し、話し合いを持った後、友情論について作文させるという手順で行われた。その結果、時間をかけ導入が行われたEクラス(19名)と、導入はなされずアニメを見ただけのGクラス(14名)の作文には、内容に明らかな差異が見られ、Eクラスの方が教師のねらいに沿った内容の作文を書いていることがわかった。また、話し合いの際、アニメを自分に共通する異文化の問題として捉え直している学生がいる一方で、頭の中だけで理論的に捉えている学生の存在も確認された。また、母国で受けてきた教育の違いのためか、討論することに慣れている学生と不慣れな学生の存在が明らかになった。以上のことから、留学生に対する「異文化」をテーマにした授業で重要なこととして、①権威的雰囲気を取り除く工夫(教師は学生の意見を独断的に評価しない)、②教材選択・テーマ選択の工夫(経験をもとに討

論に参加できる工夫)、③「参加感」を高める(ファシリテーターとしての能力を磨く)、という3つの指針が示された。そして、今後の課題として、物語を自分のことに反映して捉えることができる「メタ解釈能力」を促し物語を自らの現実に置き換えられるような導入とはどのようなものか、「メタ解釈能力」と言語能力とはどのような関係にあるのか、「メタ解釈能力」は測定可能か、という3点が挙げられ、発表が締めくくられた。

谷之口氏の発表の後、十分な質疑応答・討論の時間が設けられ、実践授業が行われたクラスの詳細や授業内容の詳細が質問されたり、文化の捉え方についての討論が行われたりした。

今回の研究会は、間際になって開催が決定されたため、外部からの参加者はなく、九州大学関係者のみの参加であったが、多文化関係学会の会員以外で専門分野も異なる参加者もあり、多角的な視点から様々な意見が交わされた。

文責：古谷真希(九州大学)

* 各地区の研究会案内の詳細についてはウェブでご確認下さい。

地区研究会のご案内

■ 2009年度 第1回北海道・東北地区研究会

日時：2009年7月18日(土) 時間は調整中です

場所：藤女子大学 北16条校舎

テーマ：文化翻訳の可能性と限界

話題提供者：1. 梁田憲一(大谷大学)

2. ロ エイエイ(札幌大学大学院)

■ 2009年度 第1回関東地区研究会

日時：2009年7月25日(土) 午後1時～4時

場所：立教大学11号館4階会議室

話題提供者：1. Voltaire Cang(倫理研究所)「無形文化遺産ができるまで」(仮題)

2. 石井敏(独協大学)「高まる宗教間対話の研究・教育の必要性」

■ 2009年度 第1回九州地区研究会

日時：2009年7月18日(土) 午後2時～5時

場所：九州大学伊都キャンパス比文言文棟3階会議室(予定)

話題提供者：1. 姚瑶(九州大学大学院)

「日本語学科におけるテレビドラマ教材の使用に関する一考察
—中国と韓国を比較して—」

★話題提供者・コメンテーター募集中!★

理事会議事録（抄録）



2008年度 第3回多文化関係学会理事会（抄録）

日時： 2009年3月14日（土） 11:00～15:30

場所： 青山学院大学 15号館5階13会議室

出席：〔敬称略、順不同〕：久米、手塚、松田、小松、河野、磯崎、久保田、抱井、田崎、清、
青木、イングルスルード、灘光

欠席：〔敬称略、順不同〕： 細川、伊藤、金本、石井（敏）、林、岩男、石井（米）

記録：磯崎

【報告事項】

- 1) 前回議事録確認
- 2) 2009年度第8回年次大会準備状況（大会委員長 久保田）
 - ・開催日は2009年10月17日（土）、18日（日）、プレカンファレンスは16日（金）である。大会テーマ（案）は「多文化間の対話と連携-心のコミュニケーションを求めて」、プレカンファレンスはICTを使って実際に海外の大学とつないで交流する参加型ワークショップが考えられていることが報告された。
- 3) 事務局より報告（小松）
 - ・会員数359名、08年度会費納入者147名、残高は東京三菱UFJ銀行に¥467,855、ゆうちょ銀行に¥1,040,780、手元現金¥77,739で、合計¥1,586,374である。
- 4) 学会誌第6号準備状況について（学会誌編集委員会 田崎）
 - ・学会誌編集長として田崎氏が担当する予定である。
- 5) ニュースレターNo.14の発行、No.15の準備（ニュースレター委員会 伊藤：メール）
 - ・次年度からはニュースレター編集会には、委員長、副委員長、レイアウト係り（1～2名）の体制をつくり、委員長と副委員長はそれぞれ年に1回ずつ編集を担当することが提案された。
- 6) 文書管理委員会（磯崎）からの報告とお願い（別添資料）
 - ・2009年3月2日時点での文書の収集状況が報告された。
- 7) 前回の大会委員会から前回大会のアンケート結果の報告（河野）
 - ・参加40名、不参加30名の計70名からのアンケート結果が報告された。全体的にやや満足以上の結果だった。
- 8) ハンガリーシンポジウムについて（松田）
 - ・3月27日のシンポジウムには日本から10名が参加する予定であることが報告された。

【審議事項】

- 1) 理事選挙について（選挙の経過・結果の報告、未決定理事の選出について）
 - ・今後の理事会メンバーの新旧交替をスムーズに行なうには、新理事を多く入れる必要があるため、現在理事16名のところを18名にすることが提案され、承認された。

- ・理事間選挙で抱井、河野、久保田、久米、松田の5氏が選出され、承認された。
 - ・会員による選挙で松永、浅井、李、田崎、イングルスルド、石井（米雄）、八島、青木、清の9氏が選出され、承認された。
 - ・新理事会枠で選出される理事の1人として小松氏が推薦され、承認された。
 - ・残り3名の選出については、現在、回答待ちの2名の候補者の回答を得た後、次に投票数の多かった会員・理事推薦の候補者を決め、順に会長が打診することになった。
 - ・新監事として石井敏氏、林吉郎氏の2名が選出され、承認された。
- 2) 会長・副会長の選出と事務局の今後の体制について（別添資料参照）・新理事会の体制（委員等）について
- ・新会長に久米氏、副会長に松田氏とイングルスルド氏が推薦され、承認された。
 - ・事務局の体制を新しくすることが提案され承認された。事務局長は全体統括と決算・予算を担当し、その下に①会員関係、②会計、③年会費の3部門を設置し、それぞれに担当委員長を置く。会員関係担当は青木氏が承認された。
 - ・新理事会を6月理事会の前倒しに5月9日（土）15:00～、または5月10日（日）13:00～に開催し、新理事の役割分担を決める。
- 3) 2010年度第9回年次大会開催校について
- ・常葉学園大学（清氏担当）で開催することが確認された。
- 4) 「学会設立十周年記念出版」について（出版企画委員会、久米）
- ・出版企画委員会委員の候補として石井（敏）氏、高橋（順一）氏、松田氏、抱井氏があげられた。次回理事会で決定予定。
- 5) 学会誌の特集号の編集について（紀要委員会、田崎、別添資料）
- ・「文化はどう研究されてきたか」を様々な分野から論じる特集号とするという案が提案された。特集号編集委員として、手塚氏、灘光氏、その他計4～5名を決めたい。特集号編集委員長も学会誌編集長とは別に決めたいという意見が表明された。
- 6) 学会誌のWeb掲載について（Web管理委員会、河野）
- ・学会誌各号の目次をWebに掲載されることが提案され、承認された。
 - ・メーリングリストを使って事務局長が会員の会費の支払い状況をチェックでき、督促のメールを出せるシステム作りをすることが提案され、承認された。
 - ・ホームページは1ヶ月毎に更新する。毎月締め切り日を設ける。
- 7) 大学退職者の学会費について（前回からの継続）
- ・次回に審議することになった。
- 8) その他：（新理事会への繰越可能議題）
- ・カンボルテール氏はホームページ英語化プロジェクト委員会委員として推薦された。
 - ・次回に検討する課題は次の通り。
 - －会費未納者の扱いについて
 - －会員・非会員の差別化＝会員へのサービスをどうするか
 - －学会ホームページの日英両語化
- ◎ 次回理事会の日時と場所
- ・2009年5月9日（土）15:00～、または5月10日（日）13:00～。場所は未定。 以上。

理事選挙結果について

(選挙管理委員長 河野 康成)

2009～2010年の理事及び監事について、以下の18名が選出されましたのでお知らせいたします。
なお、会長は、久米昭元氏、副会長は、松田陽子氏と John E. Ingulsrud 氏となりました。

●新理事会のメンバー構成（敬称略・会員番号順）

・理事（18名）

- 101 John E. Ingulsrud（明星大学）
- 110 久米 昭元（立教大学）
- 124 小松 照幸（名古屋学院大学）
- 130 松田 陽子（兵庫県立大学）
- 135 清 ルミ（常葉学園大学）
- 138 石井 米雄（人間文化研究機構）
- 145 田崎 勝也（青山学院大学）
- 149 渡辺 文夫（上智大学）
- 156 八島 智子（関西大学）
- 162 抱井 尚子（青山学院大学）
- 173 河野 康成（立教大学リーダーシップ研究所）
- 236 ギブソン 松井 佳子（神田外語大学）
- 237 久保田 真弓（関西大学）
- 258 浅井 亜紀子（桜美林大学）
- 285 松永 典子（九州大学）
- 310 青木 久美子（放送大学 ICT活用・遠隔教育センター）
- 408 赤崎 美砂（淑徳大学）
- 461 李 洙任（龍谷大学）

・特任理事（1名）

- 100 Hidasi Judit (BGF University)

・監事（2名）

- 137 石井 敏（獨協大学）
- 167 林 吉郎（a：青山学院大学、b：SIIC (Portland, OR)）

・顧問（1名）

- 167 林 吉郎（a：青山学院大学、b：SIIC (Portland, OR)）

新理事より

(敬称略、アイウエオ順)



・赤崎美砂 (淑徳大学)

はじめまして。このたび本学会の理事を仰せつかりました淑徳大学の赤崎美砂と申します。多くの会員方々と同じかと思うのですが、私も経験の中から多文化に興味を持つようになりました。日本企業で部署間の橋渡し業務をするうちに沸きあがってきた疑問が、アメリカ南部でのボランティア活動をする中でますます強い関心となって勉強を始め、現在に至っています。

専門は成人の学習理論、異文化コミュニケーションです。学習の視点で異文化コミュニケーションを読み解く研究をしてきました。現在は日本人成人のキャリア形成と学習について研究しています。仕事とプライベート・業務と学習の往復や転職等、キャリア形成には文化・アイデンティティ・コミュニケーション等の多くの課題がありますので息長く関わっていきたいと思っています。

多文化関係学会の皆さんと研鑽を積み、微力ですが理事として努力していきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

・浅井亜紀子 (桜美林大学)

多文化関係学会の理事として学会活動に関わらせていただくことになりました。

私の関心は、文化心理学、対人コミュニケーション、異文化間コミュニケーション、そして、組織コミュニケーションです。関心は広範囲ですが、最終的な目的は「多文化共生」で、そのための研究と教育をしていくことです。グローバル化した現代では、個人がその内側に多様で複雑な文化を取り込んでおり、それらの内的な心理メカニズムはマクロな歴史や文化や制度の影響を大きく受けています。同じ組織にいる多様な文化的背景(様々なサブカルチャーを含む)をもっている他者をいかに理解し、コミュニケーションをとり、互いに生かすことができるかは、組織の成功への重要な鍵となると思います。本学会が多文化共生のためにどのような役割を果たしていくべきかを、経験豊かな理事の方々をはじめ学会員の皆様と共に考え実行していくことができればと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

・石井米雄 (アジア歴史資料センター)

日本人くらい異文化について違和感をもつ国民も少ないのではないかと思います。「うち」と「そと」という二分法が日本文化の根幹にあります。「外」に対してはあくまでも「そと」として、「うち」以上に気を使います。自分はお茶ずけで我慢しても、「そと」であるお客さんには「上寿司」をごちそうする。いまから40年も昔の話ですが、京都で「外人専用トイレ」と書いてあるのを見てしみじみ日本的だなあと思った記憶があります。ロンドンにいたとき、郵便局の窓口にはインド人、バスの運転手は西アフリカ人多く見られてなるほど多文化社会とはこういうものかと実感しました。

近年、少子化の影響をうけた日本にも大勢の外国人労働者が働きにくるようになりました。彼らは「そと」の人ではなく「うち」の人、つまりお客さんではなく「隣人」でなければなりません。

ん。これは言葉の問題だけではなく、文化の問題だと思えます。しかし現実、かれらが日本社会に溶け込めず、「ゲッター」をつくらざるを得ない状況にあります。

こんなことを背景に考えるとき、多文化を研究対象とする学会が日本に生まれたことにはおおきな意味があると思えます。よその文化ではなく、日本のなかの多文化に日本人がどう対応していけばいいのか、その指針がこの学会から生まれることを期待しています。

・ギブソン松井佳子（神田外語大学）

この度、当学会の新任理事を務めさせていただくことになりましたギブソン松井佳子と申します。微力ではございますが、なにかお役に立つことができますように努力をいたしたく存じますので、どうかみなさまよろしくお願ひ申し上げます。

21世紀に入り現代世界はますますグローバル化が進み、言語、文化、経済などの境界が接触／相互浸透し、多文化共生コミュニティのヴィジョンと現実にも大きな地殻変動が起こっています。このような現況のなかで、多文化関係学会はいかにして現実の諸問題に取り組みながら研究理論や方法論を構築していけるかという切迫した課題に直面しているという認識を共有できればと考えます。そしてこの場合、個別の事例研究（ケース・スタディ）と普遍化／理論化という作業を両輪としてダイナミックに編み込んでいくことが要請されざるをえません。そのためにさしあたってアクチュアルなイシュー（特にさまざまなコンフリクト）に注目して、その解決に向けての〈対話〉がどうしても内包せざるをえない〈矛盾〉や〈葛藤〉に真摯にむきあうことができればと思えます。今後学会メンバーのみなさまとさまざまな問題について討議を重ねていけますことを心から願っております。

・松永典子（九州大学）

かつて、青年海外協力隊の日本語教師としてマレーシアで活動していた当時、そこでの異文化接触は私にとって、それまでに味わったことのないほど、「生きている」という実感を伴う楽しい体験でした。数々の摩擦やカルチャーショックを経て、多様な価値観や感受性をもった人々との出会い、交流が自分自身の人生をいかに豊かにすることにつながるかに気付いたのでした。そして、協力隊体験は私のその後の人生の大きな契機となり、研究の出発点ともなりました。大きく言えば、人は異なるものをどのように自身の中に受容し、その体験を生かしているのかに興味があります。現在、大学院の授業科目として「多文化関係論」を開講し、「文化とコミュニケーション」に関わる問題を歴史的・教育的観点から考察しています。未熟かつ微力ながら多文化関係学会の発展に何らかのアプローチができれば幸いです。どうぞよろしくご指導・ご教示くださいますようお願い申し上げます。

・八島智子（関西大学）

このたび理事を仰せつかりました八島智子です。よろしく御願ひいたします。異文化接触状況におけるコミュニケーションや第二言語習得の情意的側面などを研究対象としています。しかし、常に「文化」に対する興味が研究の秘めた推進力になってきました。一方で「文化」が再生産され、一方で人がエイジェンシーをもち「文化」を変えていくそのしくみに関心があり、そこに「異文化」との出会いや二つ目のことばがどう関わるのかを知りたいのです。そのためには、人間の

活動や実践を観察していくことが必要だと思っています。長年の間、複数の分野をまたがった研究と言えば聞こえがよいですが、異分野の狭間にはまり込み、認識論的危機を抱えたまま研究をし、試行錯誤をしながら研究指導をしております。研究と実践の融合も最近の課題です。今は、思考も研究もダイアログだと考えております。本学会での皆様との対話的交流をたのしみにしています。

・^{リー}李 ^{スーイム}洙任 (龍谷大学)

2009年～2010年度の理事の任務をお引受けすることになり、微力ではありますが、学会の発展に努力したいと思っておりますので、よろしく申し上げます。私は在日二世ですが、帰化を通して日本国籍を取得したコリア系日本人です。日本社会では何々系日本人という言葉は聞きなれないと思いますが、等質社会をよそおう日本社会に多様性を根付かせたいため、エスニック名を帰化後の本名にしました。今日の日本は少子・高齢化が進み、外国人施策の方向が大きく転換し、外国人も住民である、という考えが浸透しつつありますが、「一般永住者」ですら在留カードを常時持ち、職場や学校などの情報を逐次報告しなければならないならず、日本に再入国する際に指紋情報を提供しなければならない現実があります。三世、四世になっても外国人の扱いを受けている人たちがいる国は、先進国では日本だけです。外国人と日本人の仲介役という姿勢で、教育、研究に取り組んでいます。

* 付記：渡辺文夫氏 (上智大学) も新理事に選出されました。

Web 管理委員会からのお知らせ

(Web 管理委員長 河野 康成)

・会員専用サイトでのご所属・ご住所等の変更

ご所属・ご住所や e-mail アドレスなど登録事項が変更された方は、多文化関係学会ホームページの学会員専用サイトにて登録情報をご変更下さい。なお、ID およびパスワードがお分かりにならない方は、河野 (kono@rikkyo.ac.jp) 宛にご連絡下さい。

・登録情報変更手順

多文化関係学会ホームページ (URL: <http://www.js-mr.org/>)

→学会員専用サイト (会員番号・パスワードを入力し、ログインボタンを押す)

→登録情報更新をクリック

→変更点を修正して、一番下の更新ボタンを押す

事務局より

1. 「学会費納入方法」

(1) 学会ホームページ (URL: <http://www.js-mr.org/>) で納入状況を確認する→ (2) 郵便局の振込用紙で会費を納入する。(その際、会員番号、氏名、住所、会費年度を明記する)

【多文化関係学会の口座番号は「00120-2-536126」です。】

★各会員宛のお知らせも同封しております。どうぞご確認願います。★

2. 「新刊学会誌 (ジャーナル)」の配布方法

学会誌は、毎年3月頃学会員の皆様に配布しますが、自動的に配布するのは学会費支払い済み会員 (当該年度) のみが対象となります。したがって、3月末以降に学会費をお支払いいただいた方には、事務局から個別に「新刊学会誌」を郵送しています。なお学会誌の会員価格は2,000円です。

3. 会員の皆様へ！ 大学図書館への「学会誌」紹介のお願い！

本学会は2007年9月に日本学術会議の「協力学術研究団体」として認可され、その称号を受けました。したがって、学会誌の投稿論文も公的に認められ、さまざまな形で学術的な引用頻度が高くなってきました。この為、学会の財政基盤の一助となる、「全国の大学図書館への紹介と販売プロジェクト」にぜひご協力とお力を下さい。なお大学図書館などへの販売価格は、3,150円で、連絡先は以下のとおりです。

- 連絡先：古賀哲夫 (担当者)
- 担当部署：丸善株式会社、国内仕入部 (ブックネット S.C.)
- 住所：〒103-8244 東京都中央区日本橋3-9-2
- 電話番号：(03) 3273-1042 <Fax: (03) 3273-1043>
- E-mail: t_koga@maruzen.co.jp

お知らせ ●学会情報



《日本コミュニケーション学会》

第39回年次大会

6/27~6/28 新潟青陵大学短期大学部

《異文化コミュニケーション学会》

第24回年次大会

9/26~9/27 麗澤大学

《日本心理学会》

第73回年次大会

8/26~8/28 立命館大学

《日本交渉学会》

第22回年次大会

11/14~11/15 桐蔭横浜大学

「ワークショップ：裁判員を説得する！」

編集部より

本号より、前委員会を引き継ぐことになりました。前委員会の皆様 (伊藤明美氏・徳井厚子氏・大谷みどり氏・生越秀子氏)、本当にお疲れ様でございました。大谷みどり氏には、引き続き副委員長として、古谷真希氏とともに未熟な新体制をサポートしていただくことになりました。何かと不慣れで至らぬ点が多いかと存じますが、会員の皆様、どうぞよろしくお願いたします。

(NL委員会：松永典子・大谷みどり・古谷真希)

事務局よりのご挨拶と学会費納入のお願い

多文化関係学会(JSMR)会員の皆様へ

地球温暖化の影響か、今年はすでに真夏を思わせる日々が続いていますが、皆様におかれましては、研究、教育活動にご活躍のことと存じます。

2002年に発足しました多文化関係学会もお蔭様で今年で8年目を迎えることができました。発足以来順調に会員数も増え、現在は、秋の第8回年次大会および各地区研究会、海外シンポジウムの企画、学会設立10周年記念出版の企画、さらには学会誌やニュースレターの編集など活発に活動を展開しております。

さて、6月に入り多文化関係学会会員の皆様に、会費納入のお願いをしなければならない時期になりました。今回は、当ニュースレターと同じ郵便物に同封の郵便局「払込取扱票」にお支払いいただく会費の年度、及びお振込み金額をあらかじめ記入していますので、金額等ご確認の上お振り込みいただくようお願いいたします。(申し訳ありませんが、払込料金=手数料の支払いにつきましては会員の皆様の方でご負担をお願いいたします。)

既に、6月4日までに2009年度会費を納入いただいた方には今回「払込取扱票」は同封しておりません。また、当ニュースレターがお手元に届けられる前にお支払いいただいた場合はご容赦下さい。なお、昨年度の会費のお支払いを本年度された場合は、入金が確認出来次第、第5号の学会誌をお送りいたしますので、お振込みよろしく申し上げます。

なお、学会誌『多文化関係学』第6号につきましては完成次第(2010年2月頃)、会費の納入が確認された皆様に対してのみ事務局からお送りさせていただきます。会費納入記録に関しては、会員番号・パスワードを入れることでHP上で随時確認可能となっておりますので、会員番号・パスワードは各自で大切に記録、保管しておいてください。

多文化関係学会ホームページ：<http://www.js-mr.org/>

問い合わせ先

会費・会員番号：admin@js-mr.org (事務局長：小松照幸)
ホームページ：kono@rikkyo.ac.jp(WEB管理委員長：河野康成)

以上

多文化関係学会
事務局長 小松照幸

